

新 知 見 あ れ こ れ (7)

奥 原 弘 人

H. Okuhara : Some new or noteworthy plants found in Nagano Prefecture.

(1) アザミの雑種

昨1988年8月30日、飯綱・戸隠高原で田中豊雄氏の主催する観察会が行われた。大谷地湿原にはいろいろの湿生植物があってヤチアザミも群生していたが、ここのヤチアザミは高さ50cmくらいから下で花をつけたものは少かった。所どころに高茎のタチアザミも見えた。遊歩道を進むと北西部の一角で葉はヤチアザミの形であるが特別高茎のものが上部を引き寄せてみると頭花はタカアザミと同じであった。へんなアザミとして帰路についたが車中であれは雑種ではなかったかと気がついた。そこで9月8日に再び同地に立寄って観察した。高さは1.7mほどあり葉はヤチアザミと同じに切れ込み裂片の先は刺となっている。頭花は大きく、総苞片は形も色もタチアザミと同様であるが、頭花の柄は短くヤチアザミに近い。これらの点からこれは両種の雑種とみるほかはない。周辺を見ると高さは1m内外であるが同形のものが数株あった。これを *Cirsium iizunaense* イイズナアザミと呼ぶこととする。

(2) リョウノウアザミについて補記

この雑種について本誌第21号で報告したが、昨年も木曽郡の南木曾町と山口村でこれを観察した。根出葉は必ず残るが環境によって、その数や大きさは様ざまである。茎は高さ50~80cmで比較的細く上中部が紫黒色を帯びるものもあり分枝は少ない。茎出葉は少なく小形である。頭花は普通枝端に1個ついて上に向くが2~4個のこともある。総苞は径8mmくらいで長さ15mmくらい。総苞片は8段が普通で圧着するが外片はやや開出して先端は短く尖る。小花の長さは14mm、花冠の広筒部は5mmほどである。

道端の草地などに生えて適地では20~50株が群生している。このようなものが今まで知られていなかったということは、この方面の植物調査が不十分であったことを物語るものである。学名を *Cirsium ryonoense* とする。

(3) アシウテンナンショウの変異

木曽谷の西部にアシウテンナンショウの群生地がある。その中に仏焰苞が2枚重なったものがあった。これを東大附属小石川植物園の邑田先生に送ったところ、スルガテンナンショウやその他にもこのようなものがあるのご返事をいただいたが、この種と

しては初見らしいので、ここに報告する。なお仏焰苞なるものは葉の変化したものと考えられるので、葉が1枚余分についたと解釈することができるのであった。

(4) ツルキツネノボタンの花

ツルキツネノボタンは青森・岩手両県と長野県という限られた地方にだけ分布し、長野県では小谷村だけに見られる珍種である。花の大きさについて保育社図鑑では花卉の長さ3.5~4mmとあり、大井氏日本植物誌では花径10~12mm、花弁長4~6mmとある。ところが長野県産のものは花卉の長さ7~8mm、花径は15~17mmと前記両記載よりはるかに大きい。よってこれをオオバナツルキツネノボタン *Ranunculus hakkodensis* form. *macranthus* とすることとしたい。

(5) ミヤマハンショウヅルの花卉

大井氏によればミヤマハンショウヅルの花には4個の大きながく片があって花卉はその半長で数個あり、がく片は幾分黒色をおびた紫色で先端は短く外曲するとある。先年八ヶ岳の西側中腹で幾株かのミヤマハンショウヅルを見たので、そのつるを採ってさし木したところ一昨年花をつけた。そのがく片は普通のものに比べ多少短くてやや内曲し黒みが強かった。昨年も開花したので写真にしようとして見ると、がく片の内側にがく片よりやや短く幅の狭い花弁とみられるものが多数あることがわかった。これを外側から1枚ずつ離すと20枚以上あって幅は約4mmあり、その内側に約をもった雄しべがあった。

上記の花弁が数個あるというのは大井日本植物誌の記載であり、平凡社の日本の野生植物には花弁は多数とあるから、八ヶ岳にあったのはこれに当たりそうである。昨年また八ヶ岳中腹で観察していたところ、がく片がやや短くて花弁のないものもあった。牧野図鑑には無花弁とあるから、これはそれに当たりそうである。こうしてみるとこの種の花は何れが標準であるか不明である。

(6) 補記

先に発表したアザミの雑種のうちトヤマアザミは小沢川流域にも多いことを知った。キスマアザミ(キスアザミは誤植)は5株に殖えていたが、ノリクラフジアザミは台風によって全滅したことを知った。